

4ヶ月、3週と2日

2008(平成20)年1月22日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本・製作＝クリスティアン・ムンジウ／出演＝アナマリア・マリンカ／ローラ・ヴァシリウ／ヴラド・イヴァノフ／アレクサンドル・ポトチェアン／ルミニツァ・ゲオルジウ／アディ・カラウレアヌ（コムストック・グループ配給／2007年ルーマニア映画／113分）

……第60回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞したこの映画のテーマは、人工妊娠中絶。ルームメイトの人工妊娠中絶に献身的協力をするヒロインの気持と「闘う姿勢」を理解するためには、1987年のルーマニアのチャウシェスク政権下における妊娠、出産事情の学習が不可欠。『ヴェラ・ドレイク』（04年）との対比も大切だが、鑑賞後は人工妊娠中絶大国日本がいかにかい国か、と実感できるかも……？

ルーマニア・ニュー・ウェーブはホンモノ……？

この映画は、2007年の第60回カンヌ国際映画祭でルーマニアに初のパルムドール（最高賞）をもたらしたルーマニア映画。そしてクリスティアン・ムンジウ監督も、この映画が初出演となるヒロインのオティリアを演ずるアナマリア・マリンカもルーマニア人。プレスシートによると、ルーマニアでは1989年12月にルーマニア革命によってチャウシェスク政権が倒れた後、民主化が進められたことによって、1990年代初めからやっと自由な映画が作られるようになったらしい。そして2000年以降は30代の若い監督の作品が注目を集めるようになったため、それがルーマニア・ニュー・ウェーブと呼ばれるらしい。そして、この映画のクリスティアン・ムンジウ監督は、ルーマニア・ニュー・ウェーブの旗手としてプレスシートに挙げられているたかさんの監督たちの長兄にあたるとのこと。これらルーマニア・ニュー・ウェーブは、2007年にこの映画がパルムドールを受賞したのを筆頭に、2006年には『ブカレストの東』（06年）がカメラドールを、『世界の終わりの過ごし方』（06年）がある視点部門最優秀女優賞を、そして05年には『ラザレスク氏の最期』（05年）がある視点部門

グランプリを受賞するという成果をあげているから、すごいもの。

ちなみに、中国では1977年に文化大革命が終焉した後、1978年に北京電影学院が再開され、1982年に同学院を卒業した陳凱歌^{チェン・カイコー}、張藝謀^{チャン・イーモウ}らによって1984年以降中国ニュー・ウェーブが巻き起こったことは周知のとおりだ。さて、そんなルーマニア・ニュー・ウェーブの頂点に立った本作の出来は……？ そして、ルーマニア・ニュー・ウェーブはホンモノ……？

1987年、日本 vs. ルーマニア

私の愛読書の1つが『週刊20世紀シネマ館』。1年ごとにまとめられているこの本を読めば、1987年の日本はどんな年であったか、またその年の邦画、洋画の話題作が何であったかがすぐわかる。1987年11月6日には中曽根内閣の後を受けて、竹下登、安倍晋太郎、宮沢喜一の3人の「ニューリーダー」が激突したうえで、竹下登内閣が発足したが、日本の土地バブルはなお進行中。また、国鉄が分割、民営化されてJRが発足したのもこの年の4月だ。ちなみに、この映画を観た今日、日経平均株価は1万2775円と2005年10月21日以来2年3カ月ぶりに1万3000円を下回ったが、1987年は、10月19日にニューヨークでいわゆる「ブラック・マンデー」が発生し、翌10月20日、日経平均株価が過去最大の下げ幅を記録した年だ。

他方、1987年のルーマニアの正式な国名はルーマニア社会主義共和国。そして、その国家評議会議長（1967年～）、大統領（74年～89年）を歴任していたチャウシェスクの長期政権がなお続いていたが、この頃からチャウシェスクの退陣を求める動きが顕著になったらしい。その流れが2年後の1989年12月のルーマニア革命に結びつくわけだ。そんなチャウシェスク政権末期における「妊娠、出産」事情は、平和で自由な国日本では到底考えられないようなひどいもの……。

『ヴェラ・ドレイク』と比較対照しながら……

日本は人工妊娠中絶大国として有名だ（？）が、プレスシートに載っているデータによると、2001年度人工妊娠中絶件数は13万1588件とのこと。人工妊娠中絶を合法化するか否かには宗教色が大きく影響するから、カトリックやイスラム教の国では非合法の国が多いのが当然。そんな人工妊娠中絶が非合法だった国イギリスにおける人工妊娠中絶事情を描いた面白い映画が『ヴェラ・ドレイク』（04年）だった（『シネマ

ルーム8』335頁参照)から、『4ヶ月、3週と2日』を観るについては、是非これと比較対照したいもの。日本では明治以降富国強兵政策がとられる中、基本的に「産めよ、育てよ」の時代が続いたが、プレスシートによれば、ルーマニアでもチャウシェスク政権のもと、工業化に必要な労働力を確保するため2300万人の人口を3000万人に増やすために、「女性には最低でも3人の子どもを生むように押し付けられ、45歳に満たない女性は子どもを4人産むまで中絶してはいけないとし、14~15歳の中学生にも出産が奨励された」とのこと。またそのため、「妊娠は職場単位でチェックする係がいて、定期的に妊娠のチェックを行ない、生理が止まったものに対しては、確実に出産したかどうか調査までされた。妊娠チェックにひっかかって出産しなかった者は処罰の対象とされた。違法中絶には、厳しい懲罰刑が科せられた。避妊も禁じられ、いつしかコンドームも店頭には並ばなくなった」とのこと。

この映画は、そんな何ともすごい1987年のルーマニアにおける妊娠・出産事情の下で、女子学生オティリアのルームメイトであるガビツァ（ローラ・ヴァシリウ）の妊娠が判明し、その人工妊娠中絶のための「奮闘」を生々しく描いたちょっと風変わりな物語……。

手違いだらけの段取りの結果は……？

この映画の冒頭に提示される、オティリアとガビツァの人工妊娠中絶に向けた「打ち合わせ」をみていると、「キャンプに行くみたいね」というセリフに端的に表れているように、危機感はまだでなし。しかしその後、①予約したはずのホテルの予約がとれていない、②妊娠2カ月と聞いていたのに、ホントは3カ月だから手術の危険性が高い、③オティリアは手術をするのは女性医師だと考えていたのに、ガビツァが「予約」していたのはベベ（ヴラド・イヴァノフ）という無愛想な中年の男性医師だった、④お金（報酬）の約束もきちんとされていなかった、など不手際ばかり。

オティリアはそんないい加減な段取りをしていたガビツァを責めてはみたものの、ベベが「約束が違う！」と怒っているため、それをなだめるのが先決。用意していたお金では足りないため、不足分は数日後必ず払うと約束しても、ベベは「なぜそんな約束を信用できるのか」と全く取り合わないが、これは実はお金に代わってあることを要求するサイン……？ この機会を逃したら2度と中絶手術を受けることができないとわかっているオティリアとガビツァは今や必死。そこで、ベベの意図を察したガ

ベルリンの金熊賞が英国の人工妊娠中絶問題を描いた『ヴェラ・ドレイク』(二〇〇四年)なら、カンヌの最高賞は一九八〇年代のチャウシエスク独裁政権末期のそれを描いたこのルーマニア映画。

一人っ子政策の中国に対し、ル国は労働力増強のため、「産めよ増やせよ」の法令で中絶は厳禁。中学生にまで出産奨励

カンヌ最高賞にみる80年代ルーマニアは？

が。しかし、寮生活中の大学生オティリア(O)は、望まない妊娠をして

しまった親友ガビツァ(G)のために、非合法の中絶手術に協力する決

心な。堕胎天国の日本と違、その行動は命懸け。

また医師の選定、手術の場所、費用の段取り、必需品の準備など秘密の作

それがこの映画の真のテーマだ。Oが求めたのは人間と

に掲載します。(4月から毎週土曜日)



4ヶ月、3週と2日

あすからテアトル梅田ほかで上映

ピツァは、「オティリアは今生理中なの」と説得したものの、そんな弁解が通じるの……？

ところで、オティリアは一体なぜルームメイトのガビツァのために、そこまでの自己犠牲をしながら協力を……。

読み解くキーワードは、「秘密の共有」

なぜ、オティリアはガビツァのためにそこまで自己犠牲を……？ それを読み解くキーワードは、きっと「秘密の共有」。といっても、ここでいう女2人だけの秘密は単なる秘密ではなく、そこには自由を抑圧している国家に対して自由を求める国民の反逆という重い意味が込められているわけだ。

ベベがさかんに脅していたように、今2人がやろうとしていることは明らかな違法行為だから、それがバレれば重い罪に問われることは必至。また、掻爬した胎児をどのように廃棄するのかについても、ベベが要求するような慎重な配慮(?)が必要。しかし、そんなことをせざるをえないのは、もちろんガビツァに多少の非はあるとしても、大半の非は人工妊娠中

業も大変。どこかあなただけの雰囲気強いGの女性としてあるべき権利。それを奪う権力者は一体誰？ それはなぜ？ と手違いも。どんな根拠？ としてル国はなぜそんな国にの機会に「あなただけ」の費用不足を「あなただけ」で代払いさせられる女性としての大きな犠牲も。悪名高き秘密警察が監視する中、それほどまでにOをGの中絶協力に駆り立てた原動力は一体ナニ？

像もつかない権力による圧政と弾圧の中、Oが見せる自立した女性の生き方をしっかり味わってほしい。

大阪日日新聞 2008(平成20)年3月28日

絶を認めず、非人間的な「出産奨励政策」をとるチャウシェスク政権にある、とオティリアもガビツァも叫びたいことは明らか。とりわけ、そんなオティリアの気持が、この映画を観ているとひしひしと伝わってくる。そしてそれが、この映画に独特の緊張感を与え、パルムドールをもたらした最大の理由だと私は理解したが……。

1シーンをワン・ショットで

この映画のカメラワークには独特のものがある。それは、1シーンをワン・ショットで撮っていること。①冒頭の寮の部屋での2人の打ち合わせシーン、②オティリアが恋人のアディ（アレクサンドル・ポトチェアン）の家に母親の誕生祝いのために駆けつけた時のお祝いのシーン、③ベベによる人工妊娠中絶手術（？）の生々しいシーン、④オティリアが掻爬した胎児を廃棄するために歩き回るについて、執拗にその背後からカメラが追っていくシーンなど、その特徴はいたるところに表れている。さて、その効用は……？ プレスシートには、「本作の美学」としてクリスティアン・ムンジウ監督が自ら語っているので、是非それを参考にしながら、独特のカメラワークについても学習を……。

結末には賛否両論が……？

この映画は中盤から急に緊迫感が増幅してくるから、決して居眠りなどできないはず。とりわけオティリアとガビツァが、何かと駄々をこねて怒りを爆発させるベベを何とかなだめようとするシーンあたりからは、オティリアの苦労が並大抵のものでないことがよくわかってくる。そんな苦労をしているオティリアだから、「もし私が妊娠したらどうする？」と問いかけたことに対する、恋人アディの回答を聞いて全然納得できなかったのは当然。したがって、「もしホントにそうなれば、あなたには相談せず、ガビツァに相談するワ」というセリフになったのは当然だろう。

そんなややこしい話を終え、そして今やっと胎児の廃棄を終えてホテルに帰ってきたのに、ガビツァは部屋にいない。驚いて尋ねてみると、「あなたの友人はレストランにいる」とのことだった。そこでやっとオティリアとガビツァはレストラン内でテーブルを挟んで向き合うことになったが、さて、この映画の結末は……？ ネタばらしは避けるが、この結末のつけ方には賛否両論があるはず。さて、あなたはこんな結末に賛成、それとも……？

2008(平成20)年1月22日記